

現代首都圏女子大生における可能表現使用の一実態

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 作成者: 加藤, 和夫, Kato, Kazuo メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00001083 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



現代首都圏女子大生における可能表現使用の一実態

加藤 和 夫

一、はじめに

とかく日本語の乱れが取沙汰される昨今、その一つの事象としてしばしば話題にされるのが、可能表現における「見れる」「起きれる」「出れる」「受けれる」「来れる」式の言い方である。確かに、かつて共通語（正しくは東京語というべきか）では、これら一段活用およびカ変活用の動詞には可能の助動詞「られる」がついて、「見られる」「起きられる」「出られる」「受けられる」「来られる」（以後本稿では「られる」形と呼ぶ）となるのが一般的であったのに、近年、特に若い世代を中心に「見れる」「来れる」式（以後本稿では「レル」形と呼ぶ）の言い方が急増しているといわれる。

また、可能表現については一方で、五段（四段）動詞における「読まれる」「書かれる」式（以後本稿では「れる」形と呼ぶ）から「読

める」「書ける」式（以後本稿では「可能動詞」形と呼ぶ）への変化がある。こちらは時期的にかなり早くから起こっていたとみられ、例えば現代東京語においては、「可能動詞」形が完全に「れる」形を凌駕している。しかし、ここでも「れる」形が完全に姿を消しているわけではなく、動詞によっては割合「れる」形の力の強いものもありそうである。先の一段動詞・カ変動詞における「られる」形と「レル」形の使用状況と同様、「れる」形と「可能動詞」形の使用の実態が注目されるところである。

本稿では、五段活用・一段活用のいくつかの動詞における可能表現について、現代の首都圏に居住する女子大生の使用の一実態を報告し、その結果について考察する。

二、従来の研究から

可能表現の歴史に関する従来の研究(註1)によれば、五段(四段)動詞における「可能動詞」形は室町期に成立したと考えられ、『日葡辞書』(註2)にも例えば「Yome, uru, eta, yo me, mul, meta」(傍線筆者)などの例が見える。「可能動詞」形はその後江戸期に大きく勢力を伸ばし、すでに用いられていた「れる」形との併存状態から、ついには「れる」形を脇に追いやるまでになる。神田寿美子氏の江戸語・東京語に関する文献調査(註3)によれば、「れる」形に対する「可能動詞」形の使用は明治中頃から多くなり、明治末までに急激に増加したようである。そして、「可能動詞」形はその後も増え続けて、現代東京語では「れる」形がほとんど用いられなくなった。

一方、一段動詞・カ変動詞における「レル」形については、神田寿美子氏、鶴岡昭夫氏(註4)の調査によれば、大正期までの文献には全く確認できず、昭和に入ってから、それも昭和二〇年代以後よく現れるようになるのである。しかし、田中章夫氏(註5)によれば、一九二四(大正一三)年刊の松下大三郎著『標準日本文法』にすでに、東京語の気楽な日常会話で「起きれる」「受けれる」「来れる」が用いられるとの記述があり、その他大正末から昭和初期の小説や戯曲の中に「レル」形が見えるとのことで、その頃にはすでに、かなり用いられていた可能性が高い。すなわち、五段動詞にお

ける「れる」形とは異なり、一段動詞やカ変動詞における「られる」形はかなり長くその勢力を保持したことが知られるのである。ただそれも、今や東京語においては、「レル」形の急激な勢力拡大の前に「れる」形と同じ運命をたどらうとしている。

概略、以上のような歴史をたどったと考えられる東京語の可能表現であるが、今まさに変化のただ中にあり注目されることの多い、一段動詞・カ変動詞における「レル」形(註6)の使用状況については、従来からいくつかの実態調査がなされてきた。そのうちの主なものについては、やはり田中章夫氏により要領よく紹介されているが、田中氏の独れていないごく最近のものも含めて、その結果を概観しておきたい。

早いところでは、一九四九(昭和二四)年に国立国語研究所が都内の大蔵省高等財務研修所の職員(一四七名)を対象に実施したものと、同じく国立国語研究所がその直後に都内の小学生と成人を対象に実施した二つの調査がある。その結果は表1、2の様である。表1が前者、表2が後者の調査結果である。(註7)

表1、2からは、まだ当時は「来る」「食べる」について「レル」形の使用率がそれほど高くないこと、そして、同じ東京語でも山の手の方が下町よりも「レル」形使用率が高いことが知られる。

また、一九七一(昭和四六)年には土屋信一氏が東京語の語法のゆれに関する調査の一環として、都内の一〇の小・中学校の生徒一、五九三名について可能表現の「見られる・見れる」「来られない・来れない」の使用状況を調査し、その結果が報告されている。(註8)

表 1 「来れない」「食べれない」を使うか（東京出身者70名）

| | |
|---------------------|-------------|
| 「来られない」/「食べられない」を使う | 92.9%/95.7% |
| 「来れない」/「食べれない」を使う | 5.7%/2.9% |
| 両方使う | 1.4%/1.4% |

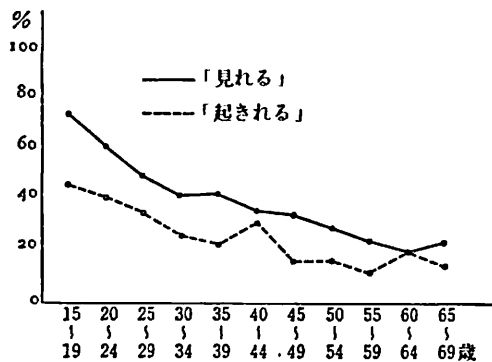
表 2 「来れる」「食べれる」の使用率

| | 来れる | | 食べれる | |
|-------|---------------|-------------|---------------|-------------|
| | 小学生 (301名) | 成人 (48名) | 小学生 (301名) | 成人 (48名) |
| 全 体 | 10.0% | 12.5% | 2.3% | 2.2% |
| 四谷・牛込 | 11.8% | 17.8% | 2.2% | 3.5% |
| 浅 草 | 8.5% | 5.0% | 2.4% | 0% |

平均では、「見れる」を使用するのが全体の約34%、「来れない」を使用するのが全体の約58%となっており、表1・表2と比較して「レル」形の増加が目立つとともに、ここでも山の手の小・中学校の方が下町のそれより「レル」形使用率が高くなっている。(注9)

さらに、国立国語研究所が一九七四・七五(昭和四九・五〇)年に実施した「大都市の言語生活調査」(注10)でも、東京における「レル」形可能表現の使用に関する調査(六三九名)がなされ、年齢別の「見れる」「起きれる」の使用率は表3のようであった。若年層

表 3 「見れる」「起きれる」の使用率（東京）
（年齢別）



ほど「レル」形を使用する傾向が著しい。

その他、一九八二〜八四(昭和五七〜五九)年には中本正智氏を中心に「東京語のゆれ」の調査がなされ、その中の第一次調査(東京居住二〇五名対象)では、一段動詞一四語(「煮る」「見る」「寝る」「出る」「起きる」「食べる」など)、カ変動詞「来る」について、第二次調査(東京居住一、〇三七名対象)では「着る」「寝る」「食べる」「来る」の四語について、可能表現形(「られる」形を用いるか「レル」形を用いるか)の調査がなされた。(注11)ここでは、そ

表 4-1 この作物はまだ——。

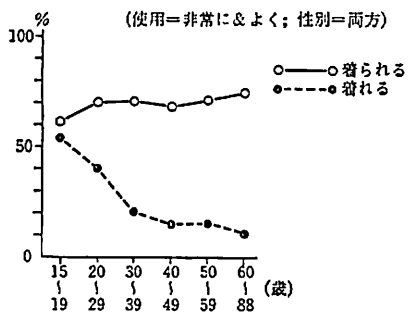
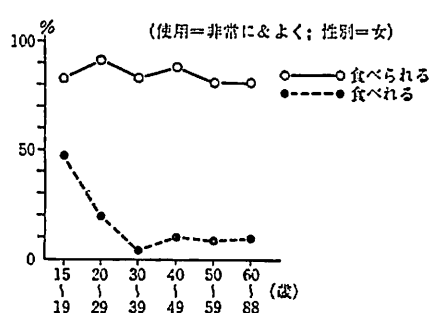
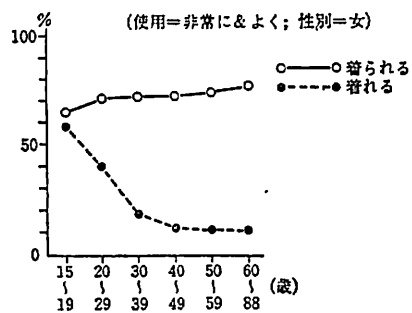
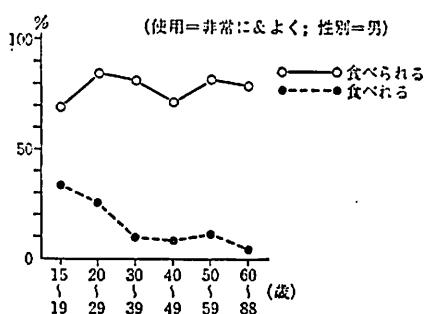
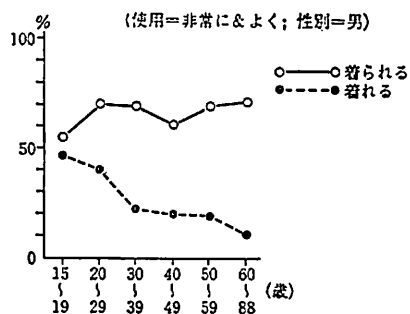
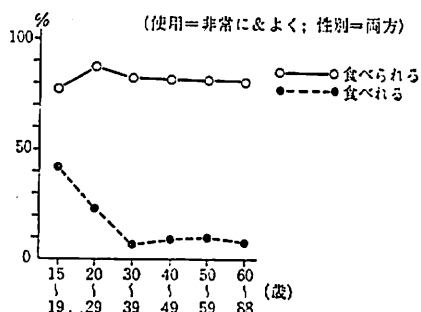


表 4-2 いつまでも——。



それぞれの動詞について三つのグラフが（男女別・男女総合の使用率が年齢別に）示されている。これらによると、同じ一段動詞でも語により「レル」形の使用率にかなり差があり、また全体に男性よりも女性の方が「レル」形使用率が高くなっている。表4—1、4—2は、第二次調査の結果から「着る」「食へる」のグラフを引用した。調査の時期が新しい割には若年齢での「着れる」の使用率が五〇%前後とそれほど高くないのは、このグラフが「非常に&よく」使用すると答えた人の数字であるためと思われる。

さて、以上のものが、現代日本語（主に東京語）の実態調査の一環として、一段動詞（カ変動詞も含むことがある）のごく一部の語について調査された結果であるとするならば、以下に示す二つのものは、十語から三〇語近い一段動詞について、「られる」形に対する「レル」形の用いられやすさの違い（中田敏夫氏の場合はそれに加えて五段動詞における「れる」形と「可能動詞」形の用いられ方と、それにとりまう可能の意味との関連）を追究したものといえる。

先行の岡崎和夫氏の調査（註12）では、都内の中学生四十一名を対象に、カ変の「来る」及び一段動詞二九語に的を絞って調査し、「レル」形の用いられやすさに、従来から言われていた音節数と音環境が関わっていることを明らかにしている。しかし、この音節数と音環境は「レル」形の用いられ方にとって重要な要因であることは確かだが、絶対的要因として働いているとは考えにくい。なぜなら、同じ音節数で下一段活用である「逃げる」と「投げる」を比べると、「逃げる」のみ用いる者が四十一名中三十二名であるのに、「投げる」

のみ用いる者は六四名、逆に「逃げられる」のみ用いる者二二五名に對して「投げられる」のみ用いる者一四八名とかなりの差が見られるからである。音環境の違いは、ここでは絶対的要因として考えにくい。そこで、そこにプラス文脈の意味の差つまり可能としての意味の差が関与していないかと考えたのが中田敏夫氏である。（註13）

中田氏は、現代東京語の一段動詞における「られる」形から「レル」形への変化に、意味的側面が関与しているか否かを検証するため、五段動詞八語十一一段動詞一〇語について、それぞれ可能の意味の違いを反映させた文脈を提示し、それらについての可能表現形式の現れを岡崎氏と同じ方法によって調査した。調査対象はある都立高校の生徒一九〇名である。その結果は、岡崎氏との比較が可能な一段動詞については、ほぼ同様の結果を得、五段動詞については、「蹴る」「行く」をやや例外として可能動詞化の徹底が確かめられた。しかし、第一の目的であった可能の意味との関連についてはその有意性が認められなかった。

三、本稿の目的

本稿では、先の中田氏の方法にはば準拠する形で、東京語という地域の枠をやや拡張、首都圏に居住する女子大生を対象に、一段動詞における「られる」形と「レル」形の実態と語による使用率の差異、さらに五段動詞における可能動詞化の徹底の度合いを確認し、さらには中田氏が試みてその有意性の認められなかった可能

の意味と形式との関連の有無の再検証を目的とした。

四、調査の概要

1. 調査日時、被調査者

調査は一九八七(昭和六二)年七月に筆者の勤務する和洋女子大学および和洋女子短期大学の学生を対象として行った。内訳は和洋女子大学国文学科二年生五〇名、三年生九名、四年生三名、和洋女子短期大学国文科二年生一七四名の計二二六名である。ただ、このうち六名は首都圏(東京・千葉・神奈川・埼玉・茨城の各県)以外の出身か首都圏以外での居住歴が長いため資料から除外し、本稿では二二〇名のデータを用いることとした。ちなみに、二二〇名について、現在居住している県別に多い順に人数を示すと左のようである。

- ①千葉県 一四六名
- ②東京都 五一一名
- ③埼玉県一九九名
- ④茨城県 一三名
- ⑤神奈川県 一名

今回の調査では、岡崎氏の被調査者(昭和五四年に二二〜二五歳。現在二二〜二三歳)、中田氏の被調査者(昭和五五年に一五・一六歳。現在二二・二三歳)とはほぼ同じ年齢層を対象としたことになる訳で、その意味では、同世代における可能表現使用の追跡調査を行ったことになり、果たして両氏の調査と同様の結果が得られるかどうかという興味とともに、一方では被調査者が女性のみであること、地域を東京以外の首都圏にまで拡げたことによる結果の違いも期待された。

2. 調査方法

調査は岡崎氏・中田氏の方法に倣い、あらかじめ用意した調査票に教室内で筆者の説明・指示に従って各自に回答を記入してもらった方法をとった。いわゆる集団面接調査である。

調査文例の作成にあたっては、結果のため五段動詞・一段動詞ともに中田氏と共通の語(一段動詞一〇語、五段動詞八語)を取り上げ、これも中田氏の方法に倣って可能の意味を三つの枠組に分け、その意味の違いをよく反映させた調査文例を作成した。三つの意味枠に従い、それぞれの語について三種類の文例を用意することを原則とした。その上で一段動詞を含むもの(三一文例)では「られる」「形」と「レル」形のいずれを使用するか、五段動詞を含むもの(二二文例)では「れる」「形」と「可能動詞」形のいずれを使用するかを選択させる方式を採用した。(注1)

可能の意味の三つの枠組とは次のとおりである。

(I) 能力可能……ある動作が動作主体の能力・意志によって実現する。

(II) 受容可能……ある動作が動作の対象である事物の具備する性質・状態によって実現する。

(III) 許容可能……ある動作が外的条件のもと、許容されることによって実現する。

このうち、一般的に言われる「能力可能」が(I)、「状況(条件)可能」が(II) (III)にあたる。

以下、調査票に並べた順序で具体的に文例を示す。

〔調査文例〕

1. a 私は水泳が得意だから一〇〇メートルぐらいなら簡単に泳
げる。
b 泳がれる。
2. a この服は小さくなったので今年はもう着れない。
b 着られない。
3. a 学校で禁止されていてあの池には魚を釣りに行けない。
b 行かない。
4. a 学校のグラウンドは本学の生徒しか走れないことになってい
る。
b 走られないことになって
いる。
5. a 駅の売店で百円ライターを買ったのでやっとタバコが吸え
る。
b 吸われる。
6. a この子は小学生なのでもうちちゃんと一人で寝れる。
b 寝られる。
7. a 今月から市外にも交換を通さずに電話がかけれるように規
則が変わった。
b かけられるように
規則が変わった。
8. a 骨折していた腕が治ったのでやっとボールが投げれる。
b 投げられる。
9. a この本は字が小さすぎて眼鏡がなければ読めない。
b 読まれない。
10. a この子はまだ小さすぎて高い階段を一人では降りれない。
b 降りられない。
11. a 成人映画は18歳以上でないと見れない。
b 見られない。
12. a 私は英語が全然話せない。
b 話されない。
13. a 事故で電車が不通になって10時までには家に帰れない。
b 帰られない。
14. a 私は恥ずかしがり屋で人前に全然出れない。
b 出られない。
15. a もう病気は治ったんだけど医者の指示でまだ肉類は食べ
れない。
b 食べられない。
16. a 私はソフトボールだったら50メートルは軽く投げれる。
b 投げられる。
17. a 私は臆病で夜の墓地にはとても一人で行けない。
b 行かない。
18. a その荷物、私ならちゃんと網棚の上にのせれる。
b のせられる。
19. a 暗い夜道は怖くて一人では帰れない。
b 帰られない。

- 20 a この子はもう一人でちゃんと電話をかける。
 // かけられる。
- 21 a 私はサッカーが得意だから正確にボールをける。
 // けられる。
- 22 a 君のような人は規則でこのクラブには入れれない。
 // 入れられない。
- 23 a 火事の時でも非常用のハシゴがあればペランダから下に降りれる。
 // 降りられる。
- 24 a 道がひどくてとても目的地まで行けない。
 // 行かない。
- 25 a このビデオは画質が悪くてとても見れない。
 // 見られない。
- 26 a 大学が禁じているので今日の抗議集会には出れない。
 // 出られない。
- 27 a ヘビースモーカーは一日に50本でも60本でもタバコが吸えるらしい。
 // 吸われるらしい。
- 28 a この2段ベッドは大人でも十分寝れる。
 // 寝られる。
- 29 a 一日中雨で今日はグラウンドを走れなかった。
 // 走られなかった。
- 30 a 規則で生徒はこの階段を使って下には降りれないことにな
 // 入れない。
- 31 a 私は仏語は駄目だけど英語だったら話せる。
 // 話される。
- 32 a この子は2歳なのでまだ一人で服が着れない。
 // 着られない。
- 33 a 今日の試験に出た漢字はむずかしくて全然読めなかった。
 // 読まれなかった。
- 34 a 目が痛んでこれ以上テレビを見れない。
 // 見られない。
- 35 a このリンゴは腐っているので食べれない。
 // 食べられない。
- 36 a ここは公営のプールだから誰でも自由に泳げる。
 // 泳がれる。
- 37 a 今日の会議には用があつて出れない。
 // 出られない。
- 38 a この棚は丈夫だからいくらでも物がのせれる。
 // のせられる。
- 39 a 生徒は放課後までは勝手に学校から帰れないことになつて
 // いる。
- 40 a このコップは普通のコップの半分しか水が入れない。
 // 入れられない。
- 41 a 規則で生徒はこの階段を使って下には降りれないことにな
 // 入れない。

41. a 法律では20歳になつてはじめてタバコが吸えるようになる。
 42. a 夜8時以降は長距離電話は割安でかけれる。
 b 吸われるようになる。
 43. a 私は鈍足で一〇〇メートルを12秒じゃとても走れない。
 b かけられる。
 44. a 日曜日学校が休みなのでゆっくりお昼まで寝れる。
 b 走られない。
 45. a 野球のルールでは牽制球は何球でも投げれる。
 b 寝られる。
 46. a 固く口どめされているのでこの秘密は誰にも話せない。
 b 投げられる。
 47. a この階段はよく知っているから目をつぶっていても降りれる。
 b 話されない。
 48. a 戦時中は英語の本は禁止されていて自由に読めなかった。
 b 降られる。
 49. a 私の友達の高校は制服が決まっていますそれ以外の服は着れない。
 b 読まなかった。
 50. a この川は汚くてとても泳げたものじゃない。
 b 泳がれたものじゃない。
 着られない。

51. a この子はまだ赤ちゃん一人でごはんが食べられない。
 b 食べられない。
 52. a 私は口の中へ火のついたマッチなんか入れれない。
 b 入れれない。
 53. a その荷物、私ならちゃんと棚の上にのせれる。
 b のせられる。
 以上の各文例が「能力可能」「受容可能」「許容可能」のいずれにあたるかについては、次頁の表5を参照されたい。

〔記入方法〕

調査票への回答の記入の仕方は、岡崎氏・中田氏の方法に全面的に従い、各文例に掲げた二つのもの(a・bで一組。計五三組)について、「ふだん親しい友達などと気楽に話すとしたら」可能の意の表現として、aの言い方(「レル」形、「可能動詞」形)を用いるか、bの言い方(「られる」形、「れる」形)を用いるかを尋ね、a・bのいずれかに○をつける、あるいはa・bのあいだに=、<、>をつけるなど、次の要領で答えてもらった。

A、aのみを使う
 b ⊕

B、a・b両方使うが、aの方をよく使う
 b < a

C、a・bとも同じ程度使う
 b = a

表 5

| 文例 番号 | 動詞 基本形 | 意 味 | A | B | C | D | E | 無回答 |
|----------|-----------|------|-----|----|----|----|-----|-----|
| 1 | 泳ぐ | 能力・背 | 229 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2 | 着る | 受容・否 | 21 | 68 | 87 | 37 | 17 | 0 |
| 3 | 行く | 許容・否 | 92 | 73 | 40 | 15 | 10 | 0 |
| 4 | 走る | 許容・否 | 224 | 2 | 2 | 1 | 0 | 1 |
| 5 | 吸う | 受容・背 | 228 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 6 | 寝る | 能力・背 | 14 | 41 | 66 | 67 | 42 | 0 |
| 7 | かける | 許容・背 | 5 | 20 | 44 | 90 | 71 | 0 |
| 8 | 投げる | 受容・背 | 7 | 18 | 54 | 83 | 68 | 0 |
| 9 | 読む | 受容・否 | 226 | 3 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 10 | 降りる | 能力・否 | 13 | 35 | 75 | 58 | 49 | 0 |
| 11 | 見る | 許容・否 | 54 | 53 | 55 | 38 | 30 | 0 |
| 12 | 話す | 能力・否 | 230 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 13 | 帰る | 受容・否 | 197 | 22 | 10 | 1 | 0 | 0 |
| 14 | 出る | 能力・否 | 22 | 46 | 59 | 65 | 38 | 0 |
| 15 | 食べる | 許容・否 | 13 | 26 | 67 | 74 | 50 | 0 |
| 16 | 投げる | 能力・背 | 11 | 23 | 44 | 90 | 62 | 0 |
| 17 | 行く | 能力・否 | 78 | 77 | 47 | 20 | 8 | 0 |
| 18 | のせる | 能力・背 | 6 | 11 | 19 | 75 | 119 | 0 |
| 19 | 帰る | 能力・否 | 205 | 16 | 5 | 3 | 1 | 0 |
| 20 | かける | 能力・背 | 2 | 20 | 33 | 90 | 85 | 0 |
| 21 | ける | 能力・背 | 182 | 25 | 14 | 5 | 4 | 0 |
| 22 | 入れる | 許容・否 | 7 | 2 | 4 | 16 | 201 | 0 |
| 23 | 降りる | 受容・背 | 10 | 28 | 51 | 87 | 54 | 0 |
| 24 | 行く | 受容・否 | 42 | 60 | 79 | 37 | 11 | 1 |
| 25 | 見る | 受容・否 | 50 | 47 | 43 | 56 | 32 | 2 |
| 26 | 出る | 許容・否 | 14 | 44 | 63 | 67 | 41 | 1 |
| 27 | 吸う | 能力・背 | 228 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 |

| 文例 番号 | 動詞 基本形 | 意 味 | A | B | C | D | E | 無回答 |
|----------|-----------|------|-----|----|----|----|-----|-----|
| 28 | 寝る | 受容・肯 | 15 | 39 | 74 | 71 | 31 | 0 |
| 29 | 走る | 受容・否 | 218 | 9 | 1 | 1 | 1 | 0 |
| 30 | 降りる | 許容・否 | 30 | 42 | 44 | 67 | 47 | 0 |
| 31 | 話す | 能力・肯 | 230 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 32 | 着る | 能力・否 | 27 | 57 | 65 | 57 | 24 | 0 |
| 33 | 読む | 能力・否 | 228 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 34 | 見る | 能力・否 | 87 | 56 | 38 | 29 | 20 | 0 |
| 35 | 食べる | 受容・否 | 11 | 45 | 55 | 67 | 52 | 0 |
| 36 | 泳ぐ | 許容・肯 | 225 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 37 | 出る | 受容・否 | 14 | 29 | 82 | 71 | 34 | 0 |
| 38 | のせる | 受容・肯 | 5 | 12 | 18 | 68 | 127 | 0 |
| 39 | 帰る | 許容・否 | 209 | 15 | 4 | 2 | 0 | 0 |
| 40 | 入れる | 受容・否 | 2 | 8 | 6 | 9 | 205 | 0 |
| 41 | 吸う | 許容・肯 | 227 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 42 | かける | 受容・肯 | 5 | 17 | 39 | 91 | 78 | 0 |
| 43 | 走る | 能力・否 | 204 | 17 | 7 | 2 | 0 | 0 |
| 44 | 寝る | 許容・肯 | 12 | 34 | 75 | 74 | 35 | 0 |
| 45 | 投げる | 許容・肯 | 5 | 21 | 46 | 80 | 77 | 1 |
| 46 | 話す | 許容・否 | 223 | 4 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 47 | 降りる | 能力・肯 | 6 | 30 | 41 | 91 | 62 | 0 |
| 48 | 読む | 許容・否 | 211 | 15 | 3 | 1 | 0 | 0 |
| 49 | 着る | 許容・否 | 37 | 45 | 49 | 65 | 34 | 0 |
| 50 | 泳ぐ | 受容・否 | 216 | 5 | 7 | 2 | 0 | 0 |
| 51 | 食べる | 能力・否 | 13 | 23 | 57 | 88 | 49 | 0 |
| 52 | 入れる | 能力・否 | 0 | 4 | 5 | 14 | 207 | 0 |
| 53 | のせる | 能力・肯 | 2 | 11 | 20 | 75 | 122 | 0 |

※「意味」の欄は当該文脈が能力(可能)・受容(可能)・許容(可能)のいずれに当たるか、さらに、それが否定の助動詞「ない」を含むか(=否)含まないか(=肯)を示している。

D、a・b両方使うが、bの方をよく使う

$b > a$

E、bのみを使う

$b > a$

五、調査結果と考察

調査結果の全体をまず表5に示す。表5で最上欄にあるA・B・C・D・Eが先に説明した回答の種類を表わしている。ここでは、まず表5の中から一段動詞の状況についてみる。

1. 一段動詞における可能表現使用の状況

本稿でも、結果の比較のために岡崎氏・中田氏と同じ集計方法によって「レル」形の用いられやすさをはかることとした。その方法とは次のようである。

- ① Aの場合のみで全回答数の過半数一一五を越えるもの……なし
- ② A+Bの場合で同じく過半数の一一五を越えるもの……34(二四三)のみ
- ③ A+B+Cの場合で同じく過半数の一一五を越えるもの……2(二七六)、11(二六二)、32(二四九)、25(二四〇)、49(二三三)、28(二二八)、14(二二七)、37(二二五)、10(二二三)、26(二二二)、6(二二二)、44(二二二)、30(二二六)
- ④ A+B+C+Dの場合で同じく過半数の一一五を越えるもの……

- 51(二八二)、15(一八〇)、35(二七八)、23(二七六)、16(一六八)、47(二六八)、8(一六二)、7(二五九)、45(二五二)、42(二五二)、20(二四五)
- ⑤ A+B+C+Dの場合でも過半数の一一五を越えないもの……18(一一二)、53(一〇八)、38(一〇三)、22(二二九)、40(二二五)、52(二三三)

※アラビア数字は文例番号、括弧内の縦数字が回答数を示す。

これらの分類とその回答数により、「レル」形の用いられやすさの順位は表6のようになる。

さて、表6と中田氏の結果を比較してみると、ほぼ一致した傾向が確かめられる。例えば先の五分類の①～⑤に属する語を比較すると次のようである。

加藤調査…①なし／②「見る」／③「見る」／「着る」／「降りる」／「出る」／⑤「のせる」／「入れる」

中田調査…①なし／②「見る」／「着る」／③「着る」／「降りる」／「出る」／「寝る」／「食べる」／④「降りる」／「寝る」／「食べる」／「かける」／⑤「のせる」／「入れる」

これを見ると、それぞれに属する語がほぼ共通しており、一段動詞における「レル」形の用いられやすさについては、語によって違いがあり、しかもその用いられやすさに一定の傾向のあることがあらためて確認された。このことについては後にまた触れる。

次に表6で、同一の語における「レル」形の用いられ方と意味と

表 6 一段動詞における「レル」形の用いられやすさの順位

| 順位 | 文例番号 | 動詞基本形 | 語幹 | 活用 | 意味 |
|----|------|-------|----|----|------|
| 1 | 34 | 見る | 0 | 上一 | 能力・否 |
| 2 | 2 | 着る | 0 | 上一 | 受容・否 |
| 3 | 11 | 見る | 0 | 上一 | 許容・否 |
| 4 | 32 | 着る | 0 | 上一 | 能力・否 |
| 5 | 25 | 見る | 0 | 上一 | 受容・否 |
| 6 | 49 | 着る | 0 | 上一 | 許容・否 |
| 7 | 28 | 寝る | 0 | 下一 | 受容・肯 |
| 8 | 14 | 出る | 0 | 下一 | 能力・否 |
| 9 | 37 | 出る | 0 | 下一 | 受容・否 |
| 10 | 10 | 降りる | 1 | 上一 | 能力・否 |
| 11 | 26 | 出る | 0 | 下一 | 許容・否 |
| 12 | 6 | 寝る | 0 | 下一 | 能力・肯 |
| 13 | 44 | 寝る | 0 | 下一 | 許容・肯 |
| 14 | 30 | 降りる | 1 | 上一 | 許容・否 |
| 15 | 51 | 食べる | 1 | 下一 | 能力・否 |
| 16 | 15 | 食べる | 1 | 下一 | 許容・否 |

| 順位 | 文例番号 | 動詞基本形 | 語幹 | 活用 | 意味 |
|----|------|-------|----|----|------|
| 17 | 35 | 食べる | 1 | 下一 | 受容・否 |
| 18 | 23 | 降りる | 1 | 上一 | 受容・肯 |
| 19 | 16 | 投げる | 1 | 下一 | 能力・肯 |
| 20 | 47 | 降りる | 1 | 上一 | 能力・肯 |
| 21 | 8 | 投げる | 1 | 下一 | 受容・肯 |
| 22 | 7 | かける | 1 | 下一 | 許容・肯 |
| 23 | 45 | 投げる | 1 | 下一 | 許容・肯 |
| 24 | 42 | かける | 1 | 下一 | 受容・肯 |
| 25 | 20 | かける | 1 | 下一 | 能力・肯 |
| 26 | 18 | のせる | 1 | 下一 | 能力・肯 |
| 27 | 53 | のせる | 1 | 下一 | 能力・肯 |
| 28 | 38 | のせる | 1 | 下一 | 受容・肯 |
| 29 | 22 | 入れる | 1 | 下一 | 許容・否 |
| 30 | 40 | 入れる | 1 | 下一 | 受容・否 |
| 31 | 52 | 入れる | 1 | 下一 | 能力・否 |

※語幹 0 とは語幹語尾の区別がないことを示す。

の関係のみることにする。それぞれの語における意味の面からみた「レル」形の用いられやすさの順位は次のようになる。意味の下、括弧内は文例番号である。

- 「見る」 能力(34) √許容(11) √受容(25)
- 「着る」 受容(2) √能力(32) √許容(49)
- 「降りる」 能力(10) √許容(30) √受容(23) √能力(47)
- 「出る」 能力(14) √受容(37) √許容(26)
- 「寝る」 受容(28) √能力(6) √許容(44)
- 「食べる」 能力(51) √許容(15) √受容(35)
- 「投げる」 能力(16) √受容(8) √許容(45)
- 「かける」 許容(7) √受容(42) √能力(20)
- 「のせる」 能力(18) √能力(53) √受容(38)
- 「入れる」 許容(22) √受容(40)

さて、この結果はいささか中田氏のものとは様子が違っている。

中田(一九八二)六九頁では一段動詞一〇語のうち能力が受容もしくは許容を下回るものが半数以上の六語となっている。「着る、出る、食べる、投げる、かける、のせる」である。このうち今回の調査でも同様の結果となったのは「着る、かける」の二語のみで、むしろ逆に能力が受容もしくは許容を上回るものが一〇語中六語となっている。中田氏は先の結果を受けながらも、その数値差が僅かであり、可能の意味の違いと「レル」形の用いられ方には有意性を認められない、つまり、東京語における「られる」形から「レル」形への移行に関しては意味的な面は関与しないと結論しているが、筆者は今回の結果から少しく違った考え方を提出しておきたいと思う。

というのは、今回の結果からは、一〇語中六語において能力の場合に受容・許容よりも「レル」形が用いられやすいという数字が出ていると同時に、先の順位では受容もしくは許容の方が能力を上回っている。「着る、寝る、かける、入れる」についても、今一度表5で「レル」形のみを使うとした、あるいは両方使うが「レル」形の方をよく使うとした回答の数にのみ注目した場合、「寝る」などはA+Bの数値では能力(五五)、受容(五四)、許容(四六)となり僅かの差ながら順位が逆転する。また、「かける、入れる」についてはそもそも「レル」形使用率が低い語であって、現時点で意味との関連を云々するのが無理なのかもしれない。つまり筆者は、「着る」を例外とすれば、千葉・東京居住者を中心とする今回の調査から

は、首都圏地域における一段動詞の可能表現使用に関して、能力可能の方が受容・許容可能よりも「レル」形が用いられやすいという傾向のあることを、言いかえれば、「られる」形から「レル」形に移行する過程で両者に意味の違いを持たせようという傾向のあったことを消極的ながら認めておきたいと考えるのである。(注15)

では次に表7で、意味を無視したところでの語による「レル」形の用いられやすさについても見ておくことにする。

表7は意味の違いを捨象して、各語における「レル」形の用いられ方の平均値(表5におけるA、A+B、A+B+C、A+B+C+Dそれぞれの値についての)を出し、さらにA+B+C+Dの平均値が全回答者数二三〇名に占める割合を%で示したものである。まずA(「レル」形のみを使う)との回答の数)の平均値に注目し、その値の大きい順に上から下に語を並べてある。

岡崎氏の論文で指摘され、中田氏の論文でも確認された、二音節上二段活用に属する語(「見る」など)が最も「レル」形が用いられやすく、これに力変(「来る」)。ただし今回は調査語から除く)、二音節下一段(「出る」など)、三音節上一段(「起きる」など)、同下一段(「投げる」など)の順で「られる」形が用いられやすくなるという傾向は今回の調査でもほぼそのとおり確認された。ただ、Aの平均値では僅かながら「寝る」より「降りる」の方が高くなり、順位の逆転がみられる。が、これも「られる」形との併用も含めた「レル」形の使用率(最右欄の%)でみた場合は、「寝る」「出る」「降りる」の順となり逆転ではなくなる。一段動詞の可能表現にお

表 7 一段動詞における「レル」形使用の平均値

| 文例番号 | 動 詞 | A | A + B | A + B + C | A + B + C + D | A + B + C + D 230 × 100 % |
|----------------|-----|------|-------|--------------|------------------|---------------------------------|
| | | | | | | |
| 11, 25, 34 | 見 る | 63.7 | 115.7 | 161 | 202 | 87.8 |
| 2, 32, 49 | 着 る | 28.3 | 85 | 152 | 205 | 89.1 |
| 14, 26, 37 | 出 る | 16.7 | 56.3 | 124.3 | 192 | 83.4 |
| 10, 23, 30, 47 | 降りる | 14.8 | 48.5 | 101.3 | 177 | 76.9 |
| 6, 28, 44 | 寝 る | 13.7 | 51.7 | 123.3 | 194 | 84.3 |
| 15, 35, 51 | 食べる | 12.3 | 43.7 | 103.3 | 179.7 | 78.1 |
| 8, 16, 45 | 投げる | 7.7 | 28.3 | 76.3 | 160.7 | 69.9 |
| 18, 38, 53 | のせる | 4.3 | 15.7 | 34.7 | 107.3 | 46.7 |
| 7, 20, 42 | かける | 4 | 23 | 61.7 | 152 | 66.0 |
| 22, 40, 52 | 入れる | 3 | 7.7 | 12.7 | 25.7 | 11.2 |

ける「レル」形の用いられやすさは、その音節数と活用の種類に深く関わっていることがあらためて確認されたわけである。

この他、「レル」形の用いられ方が、文例が肯定文か否定文かの違いを反映するかどうかにも興味はあったが、今回は調査の目的からそれを外した。ただ、中田氏同様「降りる」で意味を一定(能力可能)にして肯定・否定の二つの文例を用意したところ、否定文の方に「レル」形が用いられやすいという一致した結果が得られた。

また、同じ音節数で同じ活用に属し、肯定・否定で対立する「寝る」と「出る」、「食べる」と「投げる」においても、やはり否定文の方に「レル」形が用いられやすい傾向がみえ、この点も岡崎氏、中田氏の結果と一致し示唆的である。否定文こそが可能表現の本流で、変化が起こる場合もそちらからまず変化し始めるということなのであるうか。(佐田)今後、この種の調査を継続していく中であらためて追究してみたいと考えている。

2. 五段動詞における可能表現使用の状況

五段動詞における状況については、比較のためやはり中田氏の集計方法に倣って、表5におけるAの数字、つまり「可能動詞」形のみを使うという回答の数に注目して、表8のように整理した。

まず可能の意味との関係については、一段動詞の場合(表6参照)のようなある種の傾向は確かめられず、全体に意味に関係なく「可能動詞」化の徹底が知られる。「話す」以下「蹴る」までの「可能動詞」形の使用率はみごとに中田氏の調査結果との一致をみせ、わ

表 8 五段動詞における「可能動詞」形の使用率

| 文例 番号 | 動 詞 基本形 | 意 味 | A | $\frac{A}{230} \times 100(\%)$ | $\frac{A}{230} \times 100(\%)$ 平均 |
|----------|------------|------|-----|--------------------------------|-----------------------------------|
| 12 | 話 す | 能力・否 | 230 | 100.0 | 99.0 |
| 31 | | 能力・肯 | 230 | 100.0 | |
| 46 | | 許容・否 | 223 | 97.0 | |
| 27 | 吸 う | 能力・肯 | 228 | 99.1 | 98.9 |
| 5 | | 受容・肯 | 228 | 99.1 | |
| 41 | | 許容・肯 | 227 | 98.7 | |
| 1 | 泳 ぐ | 能力・肯 | 229 | 99.6 | 97.1 |
| 50 | | 受容・否 | 216 | 93.9 | |
| 36 | | 許容・肯 | 225 | 97.8 | |
| 33 | 読 む | 能力・否 | 228 | 99.1 | 96.3 |
| 9 | | 受容・否 | 226 | 98.3 | |
| 48 | | 許容・否 | 211 | 91.7 | |
| 43 | 走 る | 能力・否 | 204 | 88.7 | 93.6 |
| 29 | | 受容・否 | 218 | 98.3 | |
| 4 | | 許容・否 | 224 | 97.4 | |
| 19 | 焔 る | 能力・否 | 205 | 89.1 | 83.6 |
| 13 | | 受容・否 | 197 | 85.7 | |
| 39 | | 許容・否 | 209 | 90.9 | |
| 21 | 蹴 る | 能力・肯 | 182 | 79.1 | 79.1 |
| 17 | 行 く | 能力・否 | 78 | 33.9 | 30.7 |
| 24 | | 受容・否 | 42 | 18.3 | |
| 3 | | 許容 否 | 92 | 40.0 | |

ずかに違いをみせる「吸う」と「泳ぐ」の順序についても、その数値の差はごく僅かであり問題にならない。ただ、調査語の中で極端に「可能動詞」形の使用率が低い「行く」については、中田氏の調査(能力可能のみの調査)で約55%であるのに、今回の調査では能力可能で約34%とかなり低く、一番高い許容で40%、受容に至っては約18%と、意味の違いによる「可能動詞」形使用率の違いが目立つ。この語については、「れる」形がまだ根強く使用されている(注17)ため、「可能動詞」形との併用の中でやはりそこに意味の違いを持たせようという意識が働いているためかもしれない。しかし、それも語的なものと思われ、「行く」と、能力可能しか聞いていない「蹴る」を除いたその他の語については、あまりにも「可能動詞」化が進んでおり、明治期にB・H・チェンバレンが *Dialect of Tokyo* について観察したという(注18)、「れる」形と「可能動詞」形の意味による使い分けを確認する(もし使い分けがあるとすればここまで「可能動詞」化が徹底するはずはない)ことはとだいに無理なことのようである。

次に、五段動詞における「可能動詞」化の度合いと音環境との関わりについて表8を観察すると、「可能動詞」形使用率の高い「話す」から「帰る」までのグループでは、「走る、帰る」が他の四語よりやや使用率が下がり、さらに「帰る」と「蹴る」の間に小さな数字の断層が、そして「蹴る」と「行く」の間に大きな断層のあることがわかる。このことについて中田氏は、五段動詞においても音環境の違いがわずかながら働いていることが指摘できようとして、CaCv

(「行く」「走る」。Cは子音を、小文字は母音を表わす)、CaCv(「蹴る」「帰る」)の環境にあるものが、CaCv(「話す」)、CoCv(「泳ぐ」「読む」)、CaCv(「吸う」)よりも「れる」形を残しやすいう傾向を指摘している。今回の調査結果もこの傾向をほぼ確認したことになるが、その原因についてははっきりしない。(注19)今回は中田氏の調査結果の検証が主な目的で、調査語も同じにしたので、この点についても、今後さらに語数を増やすなどして追跡調査をし、検討していきたいと考えている。

六、おわりに

以上、現在首都圏に居住する女子大生の可能表現使用の一実態を見てきた。方法的には岡崎氏、中田氏のものとはほぼ同じ調査方法をとリ、また得られた結果も両氏のものとはほぼ一致したという点では、成果なき報告に終わってしまった感もあるが、調査時期・調査対象をやや違えての調査として今回の結果が報告できたことは、先行の両調査の結果を検証する意味で無意味ではなかったと考える。

言語とは常に流動的である。確かに、一段動詞・カ変動詞における「レル」形は、未だに五段動詞における「可能動詞」形のように確固たる市民権を得ていない。(注20)しかし、今や首都圏地域での一段動詞・カ変動詞における「レル」形の用いられ方は、しばしば取沙汰されるような日本語の「乱れ」とか、あるいは「誤用」として扱える範囲を越えてしまっているのではないか。

比嘉正範氏は、最近雑誌『言語生活』に寄せた一文の中で次のように言う。(注6)

「この植物は食べれる」とか「部長、これを食べてください」とか言って日本語を「乱している」と思われているのは主に若い人たちである。しかし、守る方は「乱れ」を意識しても乱す方はそれを意識しないので、両者間に葛藤があるというわけではない。(中略)このような現象が示唆しているのは、言葉に關する「正しさ」も多数決に従っているということである。つまり、文法的に、あるいは論理的に乱れていると思われる表現でさえも、みんなが使えば正しくなることを示している。(中略) 私たちにとって重要なことは、言語変化の法則を明らかにし、いかなる「乱れ」もその法則に添っていれば「正しい」と認めることである。

現在、若い世代を中心に急激に勢力を伸ばしつつある一段動詞・カ変動詞における「レル」形の使用状況をあらためて見るとき、それを「乱れ」として非難してられるのもあとしばらくとの感が強い。なぜなら、「られる」形から「レル」形への変化は、言語変化の法則に添った自然かつ合理的な変化なのだから。

(注1) 坂梨隆三(一九六九)「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』四六卷(一一号)など。

(注2) 土井忠生・森田武・長南実編訳(一九八〇)『邦訳日葡辞書』(岩波書店)八二六頁による。

(注3) 神田寿美子(一九六四)「見れる・出れる—可能表現の動き—」(『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院)。

(注4) 鶴岡昭夫(一九六七)「江戸語・東京語における可能表現の変遷について」(『言語と文芸』五四号)。

(注5) 田中章夫(一九八三)『東京語—その成立と展開—』(明治書院)の三〇三〜三三四頁参照。

(注6) 「レル」形の成立、発展については従来いくつかの要因が考えられているが、大きく関与しているものとしては次の三点が挙げられると思っている。①②は内的要因、③は外的要因である。

①「られる」形には同じ形式で他に受身や尊敬の用法があるので、他の形式に変えてそれらとの同音衝突を避けようとした。

②その際、五段動詞において「れる」形を駆逐し勢力を拡大している「可能動詞」形、特にラ行五段動詞の「可能動詞」形(「折れる、切れる、取れる、乗れる」など)に形態の上で引かれた。

③東京への人口流入にともなう、方言形としての「レル」形の移入。

(注7) 田中章夫(一九八三)「前出」三〇三頁より引用。

(注8) 土屋信一(一九七二)「東京語の語法のゆれ—児童生徒言語調査結果報告(2)—」(『文研月報』昭和四六年九月号)

三五〜三七頁参照。

(注9) このことについては、中村通夫氏が次の様に言っており、東京においては、「レル」形が主に山の手を中心に用いられ始めたことを示唆するものとして注目される。

「この言い方が東京生れの上流新層に好んで使われていることに気付いたのは、昭和三年のことであった。それまで山の手の中流の子弟の集まるある中学校に学んでいた筆者は、当時上流の集まるといわれていたある高等学校に進学し、そこではじめて、多くの学友が筆者の全く聞いたことも、ましてや話したこともなかった「来れない」ということばを相互に使い合っているのに出合っって驚いた経験がある。」(『来れる』『見れる』『食べれる』などという言い方についての覚え書)『金田一京助博士古稀記念 言語・民俗論集』一九五三年 三省堂)より。

(注10) 国立国語研究所(一九八二)『大都市の言語生活 分析編』(三省堂)のうち「5.2. 可能表現をめぐって」二三五～二四三頁参照。

(注11) 国広哲弥・中本正智(一九八四)『東京語のゆれ調査報告』(文部省科研報告書)六一～六九、一九四～二〇五頁参照。

ただしこの調査は、第一次調査・第二次調査ともに、被調査者が必ずしも東京出身者に限られていない点で、東京語の実態というにはやや問題が残る。なお、本稿で引用したグラフは、同じ資料を用いた中本正智(一九八五)『東京語のゆれについての考察』(『人文学報』第一七三号 東京都立大学人

文学部)一六六、一六八頁によるものである。

(注12) 岡崎和夫(一九八〇)『見レル』『食べレル』型の可能表現について―現代東京の中学生・高校生について行っった一つの調査から―(『言語生活』NO. 340)。

(注13) 中田敏夫(一九八二)「可能表現変遷に関する一検証―現代東京の高校生の調査より―」(『日本語研究』第五号 東京都立大学日本語研究会)。

(注14) 調査の回答の信憑性をみるために同一の調査文例を離れた位置においてみた。文例18、53の「のせる」(能力可能)である。結果は全く一致はしなかったがほぼ近似の数値を示しており、調査結果の信憑性は確かめられたと考える。

(注15) ここではあくまでも傾向の段階にとどまるが、方言の世界では可能の意味の違いが表現形式の違いに対応して用いられている例が少なくない。例えば、関西方言などにみえる「ヨー 書カン」(能力不可能)と「書カレヘン」(状況不可能)の区別は有名であるし、青森方言では可能動詞未然形+ネエ(能力不可能)と動詞未然形+(ラ)エネエ(状況不可能)の区別があるという。また、九州の多くの地域では、「読ミキラン」(能力不可能)と「読マレン」(状況不可能)式の区別、さらに大分県の一部では、「着キラン」(能力不可能)、「着ラレン」(客観状況不可能)、「着レン」(主観状況不可能)式の三つの区別があるという。

(注16) 田中章夫(一九八三)「前出」三〇頁に「日本語の可能

表現は、古来、打消をともなった不可能表現主導の形で発達してきたものであり、現代においても、可能表現は不可能の形で用いられる場合の方が圧倒的に多い。」とある。

(注17)「行く」については、表5からもわかるとおりD(両方便が「れる」形をよく使う)、E(「れる」形のみを使う)の回答がかなりの割合で現れる。D+Eの数は最も高い受容可能で四八名(約20%)、以下能力可能で二八名(約12%)、許容可能で二五名(約11%)となっている。

(注18)中田氏によれば、B・H・チェンレンは“A Handbook of Colloquial Japanese”(一八八八年初版刊)二〇二頁で、五段動詞において「れる」形と「可能動詞」形がほぼ拮抗していたであろう明治期東京語について、いわゆる「可能動詞」形で表わされる可能表現は physical ability を表わし、may よりも can 近く、「れる」形で表わされる可能表現は moral ability を表わし、can より may に近いと説明しているところ。

(注19)この点については中田氏は、「この理由は CiCu, CoCu と「れる」のついた形が一段動詞に「られる」のついた形と類

似していることによるものだろうか」と述べているが、これは CaCu, CoCu, CuCu についても同じことが言え、この考えには賛成できない。

(注20)このことには、何より国語教育の現場で「られる」形が正しいと教えられていることが大きく影響していると思われる。NHKことは調査グループ編(一九八〇)『日本人と話しことば』(日本放送出版協会)二八〇頁によれば、一九七九(昭和五四)年にNHKが全国の一六歳以上の男女三、六〇〇人に對して行った「ことばに関する意識調査」では、「見れない」「来れない」「食べれない」を「変だと思う」人と「そうは思わない」人がほぼ同数だったという。学歴別では、高学歴の人ほど「レル」形を変だとする傾向があり、地方別では、東京を含む関東で、これらを変だとする答えが特に多く、中部、中国、九州などでは少なく、さらに年齢別では、十代後半でこれらを変でないとの答えが他の年代より多かったという。

(注21)『言語生活』NO・432に掲載の「言語時評」「言葉の乱れ」参照。